

Title	文化人類學(西村眞次著, 早稲田大學出版部發行)
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.1 (1925. 2) ,p.154- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250200-0154

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文化人類學(西村眞次著)
(早稻田大學出版部發行)

世界大戰によつて從來の國家政策の上に重大なる影響が與へられたのであるが、しかもなほ吾々は國家生活の價值を必要を感ぜ、新たに民族主義の提唱をさき、殊に最近の世界の事變は人種の鬭争を激成しつつあるかに思はれる。けれども他方において吾々は國家、民族、乃至人種の鬭争の如何に恐るべく、悲しむべく、不幸なるものであるかを痛切に經驗したのであつて、この不幸を避けるために國際聯盟が組織され、人類愛が高唱され、あらゆる努力をつくして人類の和衷協調が策されつゝある。しかしこの目的の達成に最も重要なことは、各國民が相互を理解することにも、吾々が人類そのものについての知識をもつことである。前者は所謂歴史研究によつて成就されるけれども、他面においてそれは國家の盛衰興亡や文化の差異優劣を論ずるがために、却つて過大なる國民的自負心、徒らなる競争心、敵愾心をすら挑發せしむるに至るおそれがある。この弊害を防ぐためには、國家や國民といふ差別相を撤して全體としてみたる人類の發達史をもつて補はればならず、それがためには人類そのものの研究を對象とする人類學によらねばならぬのである。しかるに從來わが國の學界においては、あらゆる方面において部分的研究の可なりの發達に

もかはらず、綜合的著作には全く乏しく、人類學のごときにおいて殊に甚しかつたのであるが、最近西村教授によつて文化人類學が公刊され、この方面における缺陷をみたまふことを得たのは、まさに欣快にたへない。

著者によれば人類學は體質人類學と文化人類學とに分類され、前者には、動物學的、化石學的、生理學的、心理學的、人種學的の五目が包含される。文化の人類學は所謂人類の文化の歴史——人類の文化史であつて、『在來の所謂世界史と異つて國家といふやうな政治上の區劃などは眼中に措かず、人類を一全と見做して總體的に人類の進化を側面から觀察』するものであり、これには考古學的、工藝學的、社會學的、言語學的、土俗學的の五目が含有されるのである。而して本書はこの項目に従つて叙述され、まづ第一章緒論においては、史學と人類學、人類學の範圍、文化の定義をのべ、第二章においては考古學的考察によつて文化の時代的區劃をなして(一)木器時代、(二)石器時代、(三)金屬器時代となし、更に(二)を細別して曙石器時代、舊石器時代、中石器時代、新石器時代とし、(二)と(三)との間に金石併用時代を介せしめ、(三)を銅時代、青銅時代、鐵時代に細別してそれぞれの文化的特徴を叙し、第二章においては人類の意識の實現であるこの製作技巧を觀察し、これを實用藝術と純正藝術とに分類し

て前者においては石細工、土器造り、發火術、衣服の進歩を、後者においては歌謠、樂器、舞踏をその象徴として考察してゐる。第四章においては社會の基調をなす婚姻、及びそれに關聯する社會制度、並びに道德、慣習、法律等を考察し、第五章においては人類の社會化の標準である言語を考察してその起原、身振り、談話、信號、文字を述べ、第六章においては宗教の起原に關する層位説と等時説とを検討し、更にアニミズム、神形人視主義、神の觀念、神話と民譚を研究し、第七章結論においては本書全體の内容を概括し、最後に人類文化の將來を論じて終つてゐる。著書も言へるごとく、本書は泰西の學說に著者の創見を加味してなれるものであつて、その構成、或はその細論においては異論もないではなく、また全體としてややくひたらぬ憾みも感ずるけれども、しかしかかる種類の著書の全く缺けたるわが國においては唯一の參考書ともいふべく、これによつて吾々は文化人類學の一般に通ずることも、「人類文化の過去と、その推積であり結果である現在とを知り、更に現在の堆積であり、結果であらうことの未來を知らうとする」ことができるのであつて、つぎに著者の企圖される體質人類學、人類學史、及び應用人類學も早く公刊されて、斯界に貢獻されんことを切望してやまない。(松本芳夫)

朝鮮役(參謀本部編 偕行社發行)

本書は日本戰史の一部にして、本編・附記、附表・附圖、文書・補傳の三冊より成つて居る。

本編は第一篇起因及戰役前の形勢、第二篇前役、第三篇講和、第四篇後役、第五篇結果の五篇より成り、各篇は更に章節に分かたれて居る。附記は第一兵制兵器及築城、第二給養兵站及衛生、第三運輸通信及船舶、第四軍紀及風紀、第五區政及賑恤の五に分かれたれ、附表は軍隊の編制等合せて五表、附圖は戰鬪、行動要圖等廿二圖である。文書は本役關係の豊公文書を始め諸家文書を天正十七年三月より慶長四年正月まで年代順序に記載せられてあり、補傳は主として諸將卒の陣中に於ける戰功等を彼我の諸書より拔萃したものである。

朝鮮役は今更改めて云ふ迄も無く、東亞史上の重要な事件にして、これが後世に與へた感化影響は實に大で、これに關する研究書は少くない。就中徳富氏の日本國民史中朝鮮役は權威ある書として認められて居る。此外池内宏博士の文祿慶長の役に未完に屬するも看過し難い良著で、又杉村勇次郎氏の豊太閤朝鮮役も武人たる著者の戰術上よりこれを論じたもので、又一讀の價値があり、更に本役中心人物たる豊公の文書を蒐集したものには日下寛氏の豊公遺文がある。これ等の諸書に續いて、今回參謀本部に於て編纂のこの朝鮮役三冊が公にせられたのである。本編は本書の主要部分であるが其の記述する所甚だ簡略に過ぎるは余輩に意外の感を與へ、まゝ左袒し難い點もある。然し附記、文書、附圖、の三は參考となるところが多い。序に記して置くが、右の文書中に、本役には誰人も引用する天正十四年四月十日の毛利文書、天正十五年五月廿九日の妙滿寺文書、同年六月朔日の本願寺文書等